

失くした物と人を想う : 遺失物管理のシステム

著者	森田 由利子
雑誌名	エコノフォーラム
号	29
ページ	80-80
発行年	2023-03
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030633

失くした物と人を想う —遺失物管理のシステム

人間を考える

2022年11月18日

森田 由利子 教授

(ライフ・ライティング)
イギリス文化

先日、私はお気に入りのジャケツトを外出先で失くしてしまった。置き忘れたのではない。どこかに落としてしまったのである。急ぎ足で歩いている途中、脱いで鞆に突っ込んだ、そこまでは覚えていたが、帰宅後、いくら考えても、どこで落としたのか全く記憶がない。暫し呆然とした後、何とか割り切って諦めようとしたものの、道に落ちたジャケツトが車に轢かれたり、ドロドロになって宙を舞ったりしている映像が頭に浮かんできてしまう。そこで、帰宅経路を思い返し、できる範囲で問い合わせをしてみることにした。

調べてみると、今の時代、阪急電鉄には、Webの「お忘れ物自動受付サービス」、JR大阪駅には「お忘れ物チャットサービス」なる便利なシステムがあることがわかり、早速、紛失した日付や詳細情報を入力してみたが、あつけないほど簡単でストレスが無い。そして次に、少し悩んだ末、レシートを手掛かりに買い物に立ち寄った百貨店や店舗に電話で問い合わせをしていった。結果、どこにも届けられてはいなかったのだが、担当の方々のやり取りを繰り返しているうちに、不思議と自分の心が整っていくような感覚が

あつた。

そもそも、私はどうしてそこまでして失くした物を探そうとしたのだろうか。気に入っていたとはいえず、古い安価なジャケツトで、新しい物を買えば済むだけのことであった。いつもの私なら、「もう十分役目を果たしてくれた」などと考え、諦めたはずである。なのに、いつになく失くした物に執着してしまったのは、不意に起きた些細な負の出来事を気持ちの上でさつと処理して前へと進めないほど疲れていたからかもしれない。実際、その頃、私はとても忙しく、その日もクタクタに疲れ切っていて、「ジャケツトを道に落とすなんて」と、自分への苛立ちで潰れそうになっていた。

ところが、探していくプロセスの中で、心を前へと切り替えていくことができた。それは何故だったのだろうか。まず、大手鉄道会社が導入している遺失物管理のWebシステムの簡便性と優れた効率に驚かされた。事実、入力した翌日に連絡を頂き、ジャケツトは私の手元に戻ってきたのである。しかしそれだけではない。私の心のイガイガした疲れを和らげてくれたのは、遺失物管理に携わっておられる方々の声であった。連日同じような問い合わせに

応じておられるであろう、人によるシステムの存在の有難さを感じたのである。

手順良く淡々と対応して下さる方、「こちらにはありませんでした」と残念そうに伝えて下さる方、夕方のごった返す忙しさの中で明るい声で対応して下さる方、それぞれの声に、会ったこともない、そして、決して会うことが無い顔を思い浮かべ、心が整っていった。そして何より、ジャケツトが見つかったということは、拾ってわざわざ届けて下さった方が居ることである。「どんな方なのだろう」と、手に取って下さる場面を思い浮かべ、その人を想い、そういう人が居て、遺失物管理という社会システムは成り立っているのだと再認識した。それによって、疲れ切った自分へのみ意識が向けられていたガチガチの心に風が通ったように思うのである。